

Brown, Peter R. L. 'Augustine and a Crisis of Wealth in Late Antiquity.' Saint Augustine Lecture 2004, in *Augustinian Studies* 36:1 (2005): pp. 5-30.

上村直樹

古代末期 4-5 世紀のアフリカにおいては、その教会共同体の富裕層の地位と資産の利用の仕方について批判的な見方が存在した。そうした社会の理解に対するアウグスティヌスの対応に眼を向けることによって、それがペラギウス論争の初期（411 年と 417 年のあいだ）と共鳴していることを解明しようとする論考である。Brown はまず、アウグスティヌスが司教となったころ、アフリカ教会をこれまで支えてきた日常の寄進という活動が衰退しはじめたことを明らかにする。そこで問題となったのは、教会の信徒たちの「真の自発性」である。この時期に、ペラギウスの信奉者によって著された *De Divitiis* のうちには、富裕層によって形成された資産が、人間的な傲慢によって獲得されたにすぎないという批判が認められる。それに対して、アウグスティヌスは、富裕層に対する神の配剤を否定することなく、彼らとその魂を救済される可能性を、貧者への施しのなかに見いだそうとする。自らの資産を放擲した人々のおこないを評価するだけでなく、普通の人々が、豊かであっても貧しくとも、ひとしく神の恩恵のもとにあるという考えにおいて、ペラギウスの断罪に反対するのである。Brown は、一時の償いによってではなく、より長い時間の流れのなかで、日々教会を支え続けることが「真の自発性」であるという主張が、教会共同体のいっそうの展開を可能にした根拠であったことを示唆する。